

第14回 熊野川懇談会 議事骨子

開催日時／場所 令和3年6月27日（日）13:00～15:10／WEB 開催
出席者 委員 14名、1名欠席（別添 熊野川懇談会委員名簿 参照）、河川管理者等 7名

1. 「明日の熊野川整備のあり方（追記版）」の報告

藤田委員長より、「明日の熊野川整備のあり方（追記版）」が前回の熊野川懇談会での意見などを踏まえ、最終版として6月24日にとりまとめたことが報告された。

2. 前回の熊野川懇談会でのご質問に対する回答

紀南河川国道事務所より、前回の熊野川懇談会で各委員から受けた降雨分布や気候変動モデルなどに関する質問に回答した。

3. 新宮川水系河川整備基本方針の変更について

紀南河川国道事務所より、第111回河川整備基本方針検討小委員会で審議中の「新宮川水系河川整備基本方針の変更」の概要について報告した。

4. 河川整備計画の方向性について

熊野川河川整備計画の方向性について、つぎのとおり確認された。

- 1) 熊野川河川整備計画の対象期間は概ね30年、対象区間は国土交通省の管理区間である熊野川0.0k～5.0k、相野谷川0.0k～5.7k、市田川0.0k～2.0kを基本とする。
- 2) 熊野川河川整備計画には、国土交通省が主体の河川整備だけでなく、関係機関と連携する事項、また流域全体で推進する事項を位置づける。
- 3) つぎの主な事項について、「明日の熊野川整備のあり方」の留意点を踏まえた実現可能な整備として、河川整備計画に位置づける方向性とする。

（具体的な実施事項）

・「流域治水プロジェクト」

国土交通省が主体の河川整備だけでなく、関係機関と連携する河川整備や、必要な流域内の事業についても推進していく。

・「河川改修」

- ① 河道掘削は、河道内における重要な歴史・文化や、自然環境に配慮して実施する。
- ② 内水対策は関係機関と連携・調整しながら実施する。
- ③ 地震津波対策は、施設の耐震・操作性向上の実施に加え、関係機関と連携し、高台整備などの津波避難場所の確保を推進する。

・「既設ダムによる洪水調節機能の強化」

つぎの事項について、関係者との議論を重ね、検討を行う。

- ① 事前放流による既存ダムの空き容量の確保により、ダム放流量を低減できるよう洪水調節機能の強化
- ② 降雨予測の最新技術の活用・検討
- ③ 放流設備の改造などの調査・検討

・「総合土砂管理」

治水、土砂の利活用及び環境保全などへの効果や経済性を考慮しながら、土砂発生源の抑制や堆積土砂の除去、掘削土砂の有効活用など流域内の関係者が連携し、総合土砂管理の方策を検討する。

・「危機管理対策」

超過洪水に対しても自治体や住民と連携した対策を実施し、被害の軽減を図っていく。関係機関との連携により、住民の避難行動に繋がる配慮、工夫による防災情報の発信を行う。

5. 今後の予定

河川整備計画（案）公表までのスケジュールが確認された。

第15回熊野川懇談会が8月上旬に開催されることが確認された。

6. その他

第14回熊野川懇談会のニュースレターについては、閲覧用に設置のみとし、配布は行わないことが確認された。

以 上

◆委員からの主な意見（■委員からの意見、⇒回答）

（河川整備基本方針の検討）

■H23年9月の紀伊半島大水害見合いの基本高水24,000m³/sから1,000m³/sを利水ダムでピークカットするという説明だが、H23年9月の紀伊半島大水害では利水ダムで200m³/sしかピークカット効果はなく理屈に合わない気がする。

⇒資料は、事前放流の効果として現況施設を使った場合の流量の低減効果を試算したものである。河川整備基本方針の1,000m³/sのピークカットについては、放流設備の改造等も含めて低減を見込んでいる。

■24,000m³/sに対応した河道改修を行うと一部河道沿いの家屋移転が必要になるとのことだが、危険なところから移転できるという選択肢は残した方がいいと思う。

⇒24,000m³/sの洪水に対して、3つの工法を比較した結果、社会的な影響の大きさから、家屋移転を伴う引堤や堤防嵩上げは採用せず、治水の原則である水位を下げるための河道掘削を採用することを考えている。

■23,000m³/sを流すための掘削は、今実施している掘削より掘削量がかなり増える感じか。

⇒かなり増えていくと思う。掘削しても再堆積するので、砂州の維持管理等を含めて20年から30年間で実現的な掘削を目指していきたい。

（河道掘削）

■河道掘削が今後も続くとのことなので、掘削後の河原などで植物の群生ができる環境をどう保全していくか検討する必要がある。

■熊野速玉大社の前の河原は掘削により無くなるのか。歴史的に重要な場所なので、歴史的な景観保全と言う意味からは河原が無くなるのは非常に抵抗がある。

⇒長期的な河川整備でも干潟や重要な川原は保全する対象と考えている。20年から30年間の河川整備計画では、どこまで掘削するのかということは、委員の皆様の意見をお聞きし、地元の方のご意見も踏まえて、段階的な整備を考えていきたい。

■干潟の重要生物で「イドミミズハゼ」というハゼ科の魚類があげられている。これは地下からの湧水が生ずるような場所が生息環境の重要な条件になっている。掘削により湧水環境に大きな影響を与えるので、生息環境の保全について時間をかけて検討してほしい。

（総合土砂管理）

■河口砂州の沖合が浅くなっているように伺えるが、波浪で本川に押し寄せる砂州の形成に大きく関連しているのではないか。

⇒砂州形成のメカニズムを把握するため、モニタリング調査を含めた対応をしていきたい。

■土砂の再堆積を考えると、かなりの土砂を取っていかないといけないことになる。この土砂は上流から来るので、直轄管理区間より上流の県管理区間から土砂を取っていかないといけない。掘削したところには土砂が溜まるので維持管理が相当大変だと考えられる。

⇒20年から30年間の河川整備計画では、段階的に掘削をしていきながら影響を確認していきたいと考えている。直轄管理区間だけでなく、河川全体でどう対応していくかを考えていきたい。

以 上

資料1 熊野川懇談会委員名簿

(五十音順・敬称略)

氏名	専門分野	所属	備考
井伊 博行 い い ひろゆき	水循環、水質	和歌山大学 システム工学部 教授	
泉 諸人 いずみ もろと	歴史・文化、 観光、林業	浦島観光ホテル株式会社 取締役 浦木林業株式会社 代表取締役	
加治佐 隆光 かじさ たかみつ	水資源工学	三重大学大学院 生物資源学研究科 教授	
岸上 光亮 きしがみ みつよし	農業経済、 地域政策	和歌山大学 食農総合研究教育センター 教授	
清岡 幸子 きよおか ゆきこ	地域の特性に詳しい (新宮市)	元新宮商工会議所女性会 会長	
高須 英樹 たかす ひでき	植物、生態系	和歌山大学 名誉教授 和歌山県立自然博物館 館長	
瀧野 秀二 たきの しゅうじ	水生生物、植物	元和歌山県立新宮高等学校 教諭 熊野自然保護連絡協議会 会長	委員長代理
立川 康人 たちかわ やまと	水工学 水文・水資源学	京都大学大学院 工学研究科 教授	
中島 千登世 なかしま ちとせ	地域の特性に詳しい (新宮市)	河川を美しくする会 副会長	
早坂 豊司 はやさか とよし	広報・報道	株式会社テレビ和歌山 報道制作本部長	
藤田 正治 ふじた まさはる	河川・砂防、 森林工学	京都大学 防災研究所 教授	委員長
松尾 直規 まつお なおき	河川水質	中部大学 名誉教授	
森 信人 もり のぶひと	海岸防災工学	京都大学 防災研究所 教授	欠席
山本 殖生 やまもと しげお	熊野の歴史・文化 ・信仰	国際熊野学会 代表委員 熊野三山協議会 幹事	
横田 浩 よこた ひろし	発電水力、 水源地域対策	エネルギー戦略研究所株式会社 取締役	